佐久の先人たち㊺

佐久の洋画のパイオニア

神津港人

（1889～1978年）

負けず嫌いでブラない画家だと、彫刻家・斎藤素巖は評した。新しい流派が次々と日本に紹介された時代、潮流にのらず、写実志向を貫き豊かな色彩表現を展開した。佐久における洋画のパイオニアとして、郷土の美術文化に確かな足跡を残した。

●美術への目覚め

神津港人（本名港人）は、一八八九（明治22）年一二月二一日、北佐久郡志賀村（現佐久市志賀）に、神津豊助・たみ（旧姓小山）の次男として生まれた。本家は、「赤壁」の神津家と並ぶ佐久有数の資産家で、地域では「九郎兵衛さま」と呼ばれていたという。西洋式の神津牧場を開いた神津邦太郎は港人の従兄にあたる。志賀尋常小学校（現東小）に通っていた頃、長兄正之は東京の第一高等学校から東京帝国大学（現東京大学）に進学していた。豊助は、下高井郡平穏村（現山ノ内町）の南画家児玉果亭や、岩村田藩士の息女で石版画家の岡村政子などの肉筆画を所有していた。港人は、東京で出版される新聞・書籍や、はやりの美術品に接することができる、文化的に恵まれた環境にあった。

学業は優秀であった。算術の時間は問題を解いたあと石板を裏返し、弁慶の絵を夢中になって描いた。豊助は、港人の姿を見て「絵描きにでもなるか」と時々声をかけたというが、親子の会話のことで、岩村田高等小学校を卒業したら農業を継がせるつもりだった。

一方港人は、徐々に絵描きへの思いを強くしながら、一九〇二年、野沢中学校（現野沢北高校）に進学した。中学では、日本の洋画界創成期の画家、小山正太郎や浅井忠などが描いた鉛筆画の手本を目にし、その写実性に感心して独学で鉛筆画を学んでいった。中学四年の暑中休暇中、母親の遠縁で後に水彩画家となる小山周次に伴って、小県郡祢津村（現東御市）の水彩画家の丸山晩霞に会った。その後半年ほどは、日曜ごと、往復二二キロメートルを徒歩で通い、描きためた絵を見てもらった。中学校より遠い週一回の祢津行きがとても楽しみであった。いよいよ中学校を卒業する時に「晩霞の弟子になる。」と豊助に告げ、反対されたが、泣きながらも熱意をもって説得し、東京美術学校（現東京芸術大学）を受験することでようやく豊助の了解を得た。野沢中学校（第二回卒）から初めての美校受験生であった。

『雪の日』1912年卒業制作
黒田らの外光派を良く表わした佳作
（東京藝術大学所蔵）

●東京美術学校を二席で卒業

美校の入学試験は、石膏像の木炭デッサンであった。イーゼル（画架）の使い方も知らなかったが、晩霞の指導を受けていたので合格するつもりで挑んだ。西洋画科の定員二五名に対し約一五〇名が受験し、港人を含む二八名が合格した。同級生に、斎藤知雄（後の素巖）、萬鉄五郎らがいた。

西洋画科では、黒田清輝、和田英作らに指導を受けた。港人はデッサンにも自信をもっていたが、実技指導では描いていたデッサンを和田に「黒いぞ」と言われほとんど消されてしまった。自信を失いながらも、優秀な学科の成績と持ち前の負けん気で一・二年時は特待生となった。卒業制作の『雪の日』は、西洋画科で二席となり、学校買い上げとなった。

●写実的志向を貫いて

一九一二（明治45）年に美校を卒業した後は、帝国劇場背景部で舞台美術制作をしたり、肖像画を描いて生計を立て、実家には戻らず画家の道を歩み出している。黒田の弟子らが創立した光風会展に出品し、一九一五（大正4）年には文部省美術展覧会に初入選を果たした。

一九二〇年十月に、農商務省商業美術研究生として渡英、ロンドンのロイヤルアカデミーやパリのアカデミージュリアンに学んだ。一九二一年八月からイタリア・ドイツなどに写生旅行、翌年四月に帰国した。

帰国後は、帝国美術院展覧会などに出品していたが、一九二八（昭和3）年、彫刻家に転向した斎藤素巖が帝展彫刻部に反発して創立した構造社に誘われ、団体内に設置した絵画部の主任となり、この団体の展覧会に出品した。

『豊穣』1929年作
構造社第３回展覧会出品
（佐久市立近代美術館所蔵）

『春や春』1963年作
第34回第一美術展出品
（佐久市立近代美術館所蔵）

また、一九三二年には第10回ロサンゼルスオリンピックに日本初の芸術競技役員として渡米している。一九三五年に構造社が解散すると、自ら主宰した緑巷会（一九三九年）・創芸協会（一九五〇年に緑巷会から改名）や、一九五七年に創芸協会と対等合併した第一美術協会の展覧会で作品を発表、会を主導した。

港人の画風は、美校時代に黒田らの指導により身に付けた外光派的写実、イギリス留学の経験から試みた構成画や裸体による構想画、戦後の自然主義的風景画を経て、晩年は印象派風の色彩表現へ回帰しているが、写実志向は一貫している。後期印象派・フォーヴィズムなど西洋から次々と新しい流派が日本に紹介された時代に抗して、潮流に流されず自己の表現を追求した。

素巖は、一九二九年の港人の個展に寄せてこう記している。「君は作画上において不快よりも快を、醜よりも美を好む。その主張は尚直裁である。おつにひねらない画家である。つまりブラない画家である。」

一九七八年三月末日に風邪をこじらせて一週間ほど病臥の後、四月七日、息をひきとった。享年八八歳であった。

●佐久の足跡

港人は、長野県展の審査員など郷土の美術文化振興にも係わり、佐久の洋画界をけん引した。自らの苦労を顧みて、絵描きを目指す人に絵は教えないことを信条とした。一方で、関東大震災後に一時避難していた小諸で弟子となった内堀一男、農業画家として作品を残した佐藤利平、第一美術協会会員の大澤邦雄など、佐久の洋画家を育てた。

没後の一九八四（昭和59）年、信濃毎日新聞社から画集が刊行された。官制展覧会と距離を置き、参加した構造社の解散、太平洋戦争による緑巷会の中断など、不遇な一面もあって正当な評価を受けてこなかったが、画集刊行のために、巻かれていたキャンヴァスは再び開かれ、画業の大要を顧みることができた。豊かな色彩と堅実な画面構成に再評価の議論が高まり、翌年には大回顧展が長野県信濃美術館・佐久市立近代美術館で開催されるに至った。

一九八六年一月には、神津親人ら志賀地区の有志によって、邦太郎が志賀村長時に建築した旧志賀村役場（明治34年竣工の擬洋風建築）の二階に「志賀文化会館美術展示場」が開設され、港人の作品を鑑賞できる場所となった。（現在は閉鎖されており、その作品は佐久市立近代美術館に寄託されている。）

（土屋　信）

○参考文献
神津琢自編集　『行先 花ざかり 神津港人追想録』
神津恭介発行　一九八六